

東北に、よりそって。

東日本大震災被災者支援活動シャンティの取り組み 2017年-2018年

東日本記録誌
発行
詳しくは、
裏面に



ご挨拶

会長 若林 恭英

東日本大震災から今年(2018年)は7年目の年明けとなります。現代社会のありようを問われている、とまで言われるほどの人的・物的損失をもたらし、今なお放射能汚染による苦悩は続いています。

シャンティ国際ボランティア会としても国内の大災害を座視すべきではない(阪神・淡路大震災のときも同様)として緊急救援から続いて復興支援に携わってきました。この一連の活動において心がけてきたことは、黒子としてあくまでも地元の人たちが立ち上がろうとするお手伝い

に徹することでした。それは当会の設立当初からの理念によるものであり、主人公はそこに暮らす人たちからです。宮城県気仙沼市での子ども・漁業・まちづくり支援は2016年6月に、宮城県亘理郡山元町・福島県南相馬市における移動図書館活動と岩手県陸前高田市におけるコミュニティ図書室の活動も2017年3月と7月の地元の市立図書館の再開、生活再建に向けた動きなどを見て活動を終了しました。終了に際し、直接携わった職員に感謝の言葉や別れを惜しむ声が聞かれました。

中でも「とても寂しい思いです。でも、なくなるという事はひとつの復興だなという思いもあります」という手紙を移動図書館の職員が受け取ったそうです。私たちの活動が心に届いたという安堵もおぼえました。

これらの活動をとおして、シャンティとして学び、蓄積できたことはたくさんあります。詳しくは記録誌『試練と希望 東日本大震災・被災地支援の二〇〇〇日』(明石書店)に採録されています。是非、ご一読いただければと思います。

写真：移動図書館で訪問を続けた仮設団地跡に残った、太い柿の木一本

公益社団法人 シャンティ国際ボランティア会

私たちは向き合います。苦難の中にいる人々と世界に。



1 強制避難で分断された人と人のつながりを結び直す、地元団体の取り組みを応援

シャンティ南相馬事務所は、主に福島県南相馬市小高区において活動しています。小高区の住民は、東京電力福島第一原子力発電所の事故により、長きにわたり避難生活を強いられてきました。2016年7月、帰還困難区域を除き避難指示は解除されたものの、人口は発災時の1万2,842人から8,658人に減り、居住者は2,345人に過ぎません(2017年11月30日現在)。一気に進んだ過疎化、高齢化が地域で取り組むべき大きな課題となり、医療、交通、買い物などの環境も、震災前の状況には戻っていません。故郷への帰還が多くの方の住民の願いだとしても、帰還するかどうかは当然住民の自由で



▲サロン寄席

す。シャンティの活動も住民の帰還を促すものではありません。ただ、南相馬事務所では2012年秋から継続した移動図書館活動を通じたご縁を大切にしたいと考えています。2017年4月、5年近く事務所を置いた宮城県山元町を離れ、JR常磐線原ノ町駅そばに事務所を移転。事務所名も「南相馬事務所」と変更しました。事業の軸も、未曾有の原発事故を体験しつつも、南相馬で暮らすと決めた人々が心穏やかに過ごすことを願って、日々真剣に取り組んでいる地域の団体・組織の活動をサポートすることへと移しました。南相馬市社会福祉協議会が小高区で開いているサロンや、南相馬市立図書館の移動図書館車による災害公営住

宅への訪問において、住民同士の話の輪が広がるお手伝いをしています。サロンでは、11月、公益社団法人落語芸術協会の協力の下、落語会も開きました。はなし家さんの熱演に、何度も大きな笑いが起き、会場は暖房がいらぬほどに。南相馬事務所は、人と人が触れ合ううえで「笑い」も大切にしています。



▲南相馬市立図書館の移動図書館に同行

南相馬市社会福祉協議会のサロンでお話し相手に▶



2 後戻りではなく前に進むために、思い出を懐かしく振り返ってみる

南相馬事務所では、住み慣れた土地に戻ることを選択した方たちが、自ら下した決断のために苦しむのではなく、故郷を愛すべき場所としてとらえるお手伝いができないかと考えてきました。たとえば、子ども時代の遊びやおやつなど、昔懐かしいお話を聞かせていただくことはそのひとつです。そのような観点から、上記のサロンや移動図書館の場でもお話を聞くことを大切にしています。そんな折、地元の団体「まなびあい南相馬」が私たちと似た考えで、南相馬に暮らす高齢者から聞き書きをして本にまとめる活動をされると知り、以来、取材・編集・調査などの協力を続けてきました。「まなびあい南相馬」による聞き書き活動は、思

いもよらない発見や、出会いの広がり、新たな取り組みへの展開に満ちていました。昔の遊び道具を作ってみせてくださる方、自分の生涯を文章にまとめ直す方など。2017年2月には、その成果を『まなびあい南相馬 聞き書き選書1「語り継ぐ、ふるさと南相馬」忘れちゃいけない、あのまち、この道、わたしの家』が発刊されました。同誌は好評につき増刷されることとなり、南相馬事務所では印刷費用の支援もしました。2017年下半期には、2巻目の制作



▲地元団体の聞き書き活動に協力



も始まり、この取材・編集にも協力しています。なお、南相馬事務所の事業終了後もこの有意義な活動が継続されるよう、インタビュー、原稿化、編集・印刷などのノウハウを伝えていきたいと思っています。



▲地元団体の聞き書き活動が形に

3 現場からの声を大切に、風化防止は言葉でなく実践で

これまで東北3県で行っていた移動図書館の運行や、岩手県で運営していたコミュニティ図書室の様子を紹介してきたFacebookのファン

ページを閉じ、2017年10月からは、東京・海外事務所と同じく、シャンティのブログページで情報発信を開始しました。11月末には、現地ス

タッフの声を多数収めた記録誌を発行。2018年には、南相馬市の現状を伝える講演会・報告会を東京などでも開催する予定です。

4 子どもや子育て世代に向き合う地元団体をサポート

震災は、コミュニティや家族の分断を引き起こし、それが子育て世代にストレスを与え、幼い子どもたちの発育にも影響を及ぼしているといわれます。南相馬事務所は、子育て支援の視点で活動する地元団体にも協

力しています。より多くの子どもたちの笑顔を見ることは大きな目標ですが、子育て世代の不安を解消するためにも、専門家をまじえた勉強会などを開催し、理論・効果面の裏付け強化についても協力していきます。



▲地元文庫で読み聞かせ

宮城県気仙沼・熊本県の子どもたちの交流プログラム

2017年8月1～4日の3泊4日、熊本の一般社団法人アイ・オー・イー



▲気仙沼・熊本 交流

と気仙沼市の特定非営利活動法人浜わらすの協力により、2016年の熊本大震災で被災した子どもたちと、2011年の東日本大震災で被災した宮城県気仙沼市の子どもたちとの交流プログラムを気仙沼市で実施しました。熊本からは阿蘇山のふもとに位置する西原村の子どもたち8人が参加。ともに一つ屋根の下で寝泊まりをし、海を中心とした自然体験活動を通して、災害が起こる仕組み、

防災や減災に対する日ごろからの取り組みの大切さ、復興に向けて自分たちにできることなどを学びあいました。最終日には、お互いの町の良い点を発表するプログラムを行いました。気仙沼も熊本も大きな地震が起こり、中には家を失ってしまった子どももいましたが、それでも「地震は怖かったけど、どこにも行きたくない！自分の町が大好き！」という声が多く聞かれました。

岩手事業 終了とその後

2011.6→2017.7

2011年6月に岩手県遠野市に事務所を開き、以来、岩手県沿岸部で移動図書館の運行およびコミュニティ図書室の運営を行ってきました。訪問各所の様子を見つつ、徐々に活動を縮小。2017年7月、陸前高田市立図書館が本設として待ちに待った再スタートを切ったのを機に、2012年4月開館の陸前高田コミュニティ図書室の図書サービスも終了しました。終了時には、仮設団地の自治会が職員をねぎらってくださいました。

岩手のその後

陸前高田コミュニティ図書室は、「オアシスのように安らげる場」という利用者もいたほど、多くの方に親しんでいただきました。閉館を惜しむ声も多かったことから、同図書室が置かれていたモビリア仮設団地の



▲事業開始当初の移動図書館の様子

サポートを続けてきた地元NPO法人「陸前たがだ八起プロジェクト」が仮設団地自治会とともに、運営を引き継ぎ、「図書が置いてある集会所」として地域住民に引き続き開放されることになりました。



▲地元NPOと自治会に引き継がれた図書室

山元・南相馬 移動図書館事業終了

2012.8→2017.3

2017年3月、山元事務所が宮城県山元町および福島県南相馬市で行ってきた、移動図書館車による仮設団地への訪問を終了しました。2012年夏に山元町の徳本寺境内に開いた事務所も2017年南相馬に移転。山元町では、ブックオフコーポレーション・グループのみなさん、南相馬市では、曹洞宗復興支援室分室および曹洞宗福島県青年会、南相馬市立図書館と、毎回のように運行

ボランティアの助けを借りて、4年半にわたり走り切ることができました。活動終了に当たって、山元町では、町内を縦断するJR常磐線の山下駅、坂元駅近くに町が新設した交流施設の図書コーナーに、移動図書館で人気の高かった実用書を中心に図書を寄贈しました。南相馬市には、岩手事務所で使用していた図書館車1台を寄贈しました。現在、南相馬市立図書館が、市内の災害公営住宅

や幼稚園などへの訪問に使用しています。



▲運行最終日に利用者の方にいただいたお手紙

1995年の阪神淡路大震災以降、国内外での緊急救援活動を続けてきたシャンティにとっても、東日本大震災での被災地支援は大きな挑戦の連続でした。大規模で広範囲にわたる災害、時間の経過とともに変わるニーズ、海外を含む多くの方々から届く支援の声、原発の問題、緊急救援から復興へ、地域の方々との連携、国内における初めての移動図書館活動を通じた支援、4事務所30人を超える職員体制。活動

に関わった職員ひとりひとりが、「支援とは?」「寄り添うとは?」といった答えのない命題を抱え、奔走した日々。支援活動の記録だけではなく、職員が被災地で悩み考えたこと、シャンティの活動に関わってくださった被災地の方々の思いがこぼれた1冊です。6年間の支援活動を通じてシャンティが得た教訓を<人間観、文化観、死生観><支援活動のあり方>として12の視点にまとめました。是非、ご一読いた

だき、ご感想を共有いただけたらありがたいです。



内容

- 第1章 緊急救援はこうして始まった
- 第2章 つながる人の和 復興プロジェクト気仙沼
- 第3章 走れ東北! 移動図書館
- 第4章 黄色いバスがやってきた!
- 第5章 これだけは伝えたい12の視点

ご注文方法

- お名前とご連絡先(住所・電話番号)を添えて、下記の電話番号、ファックスまたはメールでお申し込みください。振り替え用紙をお送り致します。なお、記録誌は入金確認後の発送となります。
担当: 事業サポート課
電話: 03-5360-1233 FAX: 03-5360-1220 メール: shinsai@sva.or.jp
- 書籍代(本体価格2,500円+消費税)に加え、送料として一律300円かかります。

気仙沼蔵内産

「こいわかめ」

宮城県気仙沼市の蔵内(くらうち)地区の寒流と暖流がぶつかる豊かな海で育ったわかめは豊富な栄養分を吸収するため、肉厚で味わいの深い「うま味の濃い」わかめに育ちます。

津波の後で一艘だけ残った船をもとに漁業の再開を決意した漁師の協業グループ「蔵内之芽組」が育て上げた、本場のわかめをぜひ一度、ご賞味ください。



1袋
500円
(税別)+送料

▶注文は

「蔵内之芽組」のホームページの「ご注文・お問合せ」からお願いします。

あんでねっと
復興のアクリルたわし

「あんでねっと」は、編み物をあんでネットワークを広げようという意味です。東北のお母さんたちが仮設団地の集会所を交流の場としてコミュニティづくりに取り組んでいます。地元の特産品である海の生き物などをモチーフにしています。売上は「あんでねっと」の制作者の手間賃とお母さん方の活動費に充てられます。



▶注文は

「クラフトエイド」のホームページの「東北復興支援」からお願いします。

東日本大震災支援募金 決算報告書

(2017年1月1日～12月31日)

【収益】

項目	金額
指定正味財産からの受取寄附金振替額	26,580,038
指定正味財産からの受取補助金振替額	568,512
その他収益	40,682
収益合計	27,189,232

*東日本大震災支援募金は、すべて、指定正味財産の受取寄附金/受取補助金として計上した後、費用に応じて収益に振り替えています。

【費用】

項目	金額
復興支援費(気仙沼事業)	841,881
復興支援費(岩手事業)	3,884,631
復興支援費(山元・福島事業)	7,846,495
共通費用	14,616,225
費用合計	27,189,232

【2017年度寄附金・補助金】

項目	金額
東日本大震災・無指定募金	6,862,376
気仙沼事業指定募金	5,000
岩手事業指定募金	11,200
山元・福島事業指定募金	877,767
合計	7,756,343

東日本大震災支援寄附金預金残高 30,809,172

募金の
お願い

被災地の復興は中長期的な活動となります。引き続きのご支援をお願いします。

郵便振替

振替口座: 00170-80397994

加入者名: SVA 緊急救援募金



〒160-0015

東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階

TEL 03-5360-1233 FAX 03-5360-1220

WEB www.sva.or.jp



この冊子は環境に配慮し、再生紙及び植物油インキを使用しています。



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。